

毎日俳壇

片山由美子選

父の下駄はいて輪に入り庭火花

和歌山 桑原 里美

△評▽きょうだいが庭に出て火花を楽しんでるのだから。庭用に使われている父の大きなげたをちよっと借りてということ。

鈴立の父黙々ときききと

長岡京市 みつきみすず

△評▽祇園祭の山鉦を組み立てるのが鈴立。手際よく作業を進める父が誇らしいに違いない。

頭上まで上げて乾杯生ビール

北九州市 篠原 敬祐

青ぶたう家継ぐことを決めにけり

日高市 金澤 高栄

声に聞き覚えのありてサングラス

さぬき市 景山 典子

工場の廃墟と化して月見草

志木市 谷村 康志

梅の美のはち切れさうな青さかな

久喜市 梅田ひろし

夏帽子ぬぎたる風の切り通し

福岡 村岡 昇藏

劇場の跡地小さく戻り梅雨

東京 郡司 正男

山青し注連縄替ふる浦の上

伊勢市 奥田 豊

小川 軽舟選

ひまはりや泣くだけ泣きて空仰ぐ

東京 小栗しづゑ

△評▽思いきり泣くことで悲しみを振り払って立ち直れる。終戦の日の空を思わせるが、それに限るものではないだろう。

梅雨入りして憂の重き御坊かな

大阪市 湯浅 喬

△評▽降り続く雨にぬれた寺の大きな瓦屋根がのしかかる。御坊と呼んで親しみを感ずる。

玄海の闇豊かなり夜光虫

北九州市 宮上 博文

児童九人校外授業青田風

沼津市 川井大次郎

山鳩のこゑくつきりと梅雨明けける

武蔵野市 相坂 康

灯を消して波音だけの夏夜敷

西宮市 上田 佳子

茶屋街の瓦連なる夕立かな

香取市 多田ひろみ

掛軸の鯉青々と夏夜敷

刈谷市 刈屋まさを

新しき安全靴やなめくじり

鈴鹿市 岩口 巳年

道に出てバットの素振り梅雨晴間

所沢市 須田 菊枝

西村 和子選

流木の根の向かひ来る出水川

東京 望月 清彦

△評▽今年も各地で出水の被害が出た。根こそぎ流されて来る樹木を真体的に描いたことで、洪水の恐怖と危機感が迫る。

本の虫スマホの虫に扇風機

東大阪市 末吉 利次

△評▽本好きの子、スマホを手放さない子。均等に風を送る扇風機。夏休みの家庭の光景。

蝦蟇跳ねて身の丈はとも進まざる

大分市 久重 豊治

腰据ゑて引かねば草に追付けず

唐津市 河見 紀子

葎切や大河容易に暮れ切らず

久喜市 利根川輝紀

若葉噴く釣り竿たたみ寝転ばば

柏市 木地 隆

住所録一行消して夜の秋

東久留米市 矢作 輝

起きたての子を伴ひて茄子畑

城陽市 近藤 好廣

花枯榴たつぷり散つて雨上り

大阪 池田 壽夫

月目指す精霊舟や傾きつつ

伊万里市 田中 秋子

井上 康明選

母との思ひ出子との思ひ出天瓜粉

東京 小栗しづゑ

△評▽作者は胸のあたりのあせもに、天花粉を振ったのだろう。子育てからなつかしい母へとほるかな回想、字余りが生きている。

クロサイの涙袋や風灼ける

鹿児島市 岡村梨枝子

△評▽動物園のクロサイのつぶらな目と涙袋。炎熱の風が吹いて、アフリカのサバンナを想像する。

夏蝶にニライカナイの空の青

熊本市 加藤いろは

滾々と湧く真清水の手に固し

富士市 後藤 秋臣

蝸や葬列の前歩く犬

相模原市 はやし 央

炎屋を行く無農薬野菜売り

富士宮市 渡邊 春生

とつとつつけたる緑陰が屋上に

甲府市 村田 一広

炎天の人ことごとく歩を早む

さいたま市 関根 道豊

機嫌よき嬰を転がし天瓜粉

筑西市 大久保朝一

雲の峰戦を憂ひつつ黙す

唐津市 梶山 守

<歌集>

新刊

<句集>

◇池田澄子『月と書く』第8句集。かろやかな文体に濃い内容を織り込んで、読者のもとに届けてくれる句集である。△逢(あ)いたいと書いてはならぬ月と書く△△空を区切るすべなく敗戦日△△湯水のようにつかういのち竹の花△△帰つてもひとりだけ綺麗(きれい)な月△△(朔出版・208600円)

◇橋本榮治『瑠伽(ゆが)』第5句集。季語の多彩さ、旅した土地で詠まれた作品のすこやかさと全編を貫く静かさが特徴的な句集である。△虫売や闇より暗く装へる△△干菜(ほしな)風呂野州の果は風荒き△△洛北(らくほく)山中をみなへし△△(角川書店・29700円)

◇山口昭男『礫(つぶて)』第4句集。季語の飛び方に特徴がある。水の百態を描いたともいえる作品が多くあったのは興味深い。△ゆつくりと水の上をこぼる水△△水が水またぎてゆくや神の留守△△水を見てほめたる人や更衣(ころも)がえ△△(ふるんす堂・30800円) (俳人・樺未知子)

◇秋山佐和子『西方の樹』岡野弘彦を師として、原阿佐緒や三ヶ島霞子の研究者でもある著者の第9句集。2014年から23年までの作品を収録。次男や義母を亡くした悲しみを悼む歌にこめる。△アガパンサスあぢさゝの桔梗(ききょう)△△(砂子屋書房・33000円)

◇森川多佳子『そとへゆくまで』情愛が深く、芯が強く、誠実に現実と向き合う著者の第2句集。重い脳性麻痺の弟を包みこむように詠む歌に心うたれる。△夏すくてもう澄んである陽(ひ)のなかにさらさらわらふ風(かぜ)の樺(けやき)は△△(角川書店・28900円)

◇塚田千束『アスパラと潮騒』第1句集。第84回短歌研究新人賞の受賞作を収録。医師である自らを見つめる目が新鮮。△通り雨いつかの不在を知らぬから君と過(すご)した一夏(なつ)た△△先生と呼ばれるたびに錆(さび)びついた胸に一枚白衣を羽織る△△(短歌研究社・22000円) (歌人・中川佐和子)